

教育思想史学会

第23回大会プログラム

2013. 9. 14 ~ 2013. 9. 15

慶應義塾大学三田キャンパス



主催：教育思想史学会 共催：三田哲学会

大会参加費

一般		学生・非常勤	
会員	¥2,000	会員	¥1,000
非会員	¥2,500	非会員	¥1,500

懇親会費

一般	¥5,000	学生・非常勤	¥3,000
----	--------	--------	--------

大会日程

第1日 (2013.9.14)

- 10 : 00～ 受付 (西校舎 2階)
- 10 : 30～12 : 15 **Forum 1** (527教室)
学校批判としての職業教育を読み直す
——職業教育と普通教育の境界を越えて——
- 12 : 30～13 : 30 理事会・編集委員会合同会議(522教室)
- 13 : 45～16 : 45 **Symposium** (527教室)
教員養成と教育思想史
- 17 : 00～17 : 45 総会・奨励賞授賞式 (527教室)
- 18 : 00～20 : 00 懇親会 (南校舎 4階 ザ・カフェテリア)

第2日 (2013.9.15)

- 9 : 00～ 受付 (西校舎 2階)
- 9 : 30～12 : 00
Colloquium 1 (524 教室) 教育思想史の課題と方法・再論
—森田尚人・森田伸子編『教育思想史で読む現代教育』を手がかりに—
- Colloquium 2** (522 教室) 『自己を超えて』
—哲学のサブジェクト転換—
- Colloquium 3** (523A教室) 政治と道徳のあいだ
—H. アレントの視点から—
- Colloquium 4** (523B教室) 教育関係論・学び論から世代継承のメディア論へ
—日韓の教育思想史研究は世代継承の実践知をどのように論じ、発信してきたか—
- Colloquium 5** (525A教室) 「高等」教育とはなにか
—思想史が問う—
- 13 : 30～15 : 15 **Forum 2** (527教室)
政治的教育人間学の成立可能性を考える
——フロム・マルクーゼ論争の再読を手がかりとして——
- 15 : 45～17 : 30 **Forum 3** (527教室)
西洋近代教育への対応の仕方をめぐって
——教育の「中国化」を手がかりに——

学校批判としての職業教育を読み直す

——職業教育と普通教育の境界を越えて——

報告者: 江口潔(芝浦工業大学)

司会者: 小玉重夫(東京大学)

近年、仕事をテーマにした学習に対する関心が高まっている。そこでは学校生活と将来の社会生活との乖離を問題としてきた。そうした中で職業教育と普通教育とを対立させたまなざしは、解きたい二項対立の中に学校教育を投げ込んでしまうという点で、本学会で論じられてきた新教育の問題圏と重なっている。

報告者はこうした課題に関わって、戦前期の商店における店員訓練について検討してきた。そうした取り組みから考えたのは、普通教育への偏重を批判するだけでなく、職業教育そのものを読み直すことが必要なのではないか、ということである。脱工業化社会への移行がすすむ中で働き方は複雑化している。社会が成長し続けることを前提として、特定の技術に基づいたアイデンティティ形成を論じるだけでは不十分なのではないだろうか。

このような問題意識から、本報告では戦前期の職業に関する教育について見ていくこととしたい。徒弟制における学びを評価する立場は、身体化された知を形成するプロセスを明らかにすることで、生活から切り離された学校教育を批判している。そうした視点は、戦前期の日本でも、旧来の習熟の様式から変わりつつあった青年層の教育に対しても向けられてきた。このような学校批判としての職業教育を読み直していくこととしたい。

教員養成と教育思想史

いまあらためて教員養成と教育思想史の関係を問い直そう。教育思想史にとって教員養成とは、そして教員養成にとって教育思想史とは、どのような意味をもつのか。

教育思想史は、これまで日本の教員養成、特にそのカリキュラムにおける主要な構成要素の一翼を担ってきた。現行の教育職員免許法施行規則第6条には、免許状授与要件としての「教職に関する科目」の単位修得方法に関する表が示されている。その第三欄「教育の基礎理論に関する科目」に含めることが必要な3つの事項のうちの一つが「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」とされている。まさに教育思想史である。実際にも、さかのぼれば近代日本の教員養成（師範学校教育）の草創期には、ペスタロッチ（主義）やヘルバルト（主義）などの教育思想が強い影響力をもった。それは単なる教授方法の理論面にとどまらない。教育思想史、特に思想家列伝的なそれは、あるべき教師・教育者像の構築にも大きく貢献した。教育思想史は、教員養成の学としての教育学における「カノン」の形成に重要な役割を果たしたのである。

しかしながら近年の教育思想史研究、特に私たちの学会の議論は、このような教員養成を含む近代教育（学）のシステムと思想に対して根源的な反省を加えてきた。近代教育と教育学・教育思想史の「癒着」の構造を暴き出し、「教育」を裏支えする役割から、それを批判的に再定義・再構築することをめざす教育思想史への転換をはかってきた。教育思想史と教員養成との「蜜月」は、もはや過去の思い出になりつつある。

報告：橋本美保（東京学芸大学）
山崎洋子（武庫川女子大学）
渡邊隆信（兵庫教育大学）

司会：松浦良充（慶應義塾大学）
松下良平（金沢大学）

一方、現在の改革・政策では、「実践的指導力」を有し「学び続ける教員像」や「学校現場での実践につながる教育学研究の成果」にもとづく教員養成が標榜されている。高度専門職業人養成をめざしての教職大学院の推進、教員養成の高度化・修士化、あるいは「数年の」試用期間（インターン）制度の導入などによって、今後ますます教員養成において教育思想史の果たす役割が弱体化していくのは避けられないであろう。もっとも、教育思想史は、「実務」に傾斜するあまり理論・学問研究を軽視する傾向を危惧するとはいえ、当初から理論＝実践問題を自らの大きな課題としてきたはずである。にもかかわらず私たちは教員養成の文脈で正面からこの課題に向きあってきたであろうか。

このように、いま、私たちの教育思想史とその研究は、教員養成との関係において二重の意味で大きな変化に直面している。教育思想史研究の現実的・制度的基盤が教員養成にあるとすれば、それは大きな危機でもあり、教育思想史と教員養成との関係の編み直しが差し迫った課題となる。そのとき、私たちの教育思想史研究はどのような展望を描き、どのように進んでゆけばよいのか。私たち固有の観点から教員養成（論）について根源的な議論を展開し、その「これから」を展望したい。

Colloquium 1

9:30~12:00 524教室

教育思想史の課題と方法・再論

—森田尚人・森田伸子編『教育思想史で読む現代教育』を手がかりに—

企画者：下司晶（日本大学）

司会者：下司晶

報告者：白銀夏樹（関西学院大学）

綾井桜子（十文字学園女子大学）

辻敦子（奈良女子大学）

指定討論者：森田尚人

須川公央（弘前学院大学）

森田伸子

今井康雄（日本女子大学）

教育思想史ならではの課題と方法とは何か。それは隣接領域である教育哲学や教育史研究とどのように異なるのか。原聰介氏はかつて、教育思想史の固有性を「近代問題」への接近に求めたが（『近代教育フォーラム』第10号）、会の拡大発展によって会員の問題関心は多様になってきている。

では今日、教育思想史には何ができるのか。そのアクチュアリティとは何か。本コロキウムでは、この古くて新しい問題を検討したい。その際、現代教育におけるホットな話題に教育思想史という手法からアプローチした『教育思想史で読む現代教育』（森田尚人・森田伸子編、勁草書房、2013年）を手がかりとしたい。先達に学びながらも、これまでの教育思想史研究の限界を批判的に乗り越えるためである。

立場や世代を超えた議論によって、本学会の方法論議が創造的に発展することを願っている。

Colloquium 2

9:30~12:00 522教室

『自己を超えて』

—哲学のサブジェクト転換—

企画者：斉藤直子（京都大学）

通訳：斉藤直子

報告者：Paul Standish（ロンドン大学教育研究所）

指定討論者：飯田隆（日本大学）

司会者：三澤紘一郎（東京福祉大学）

小野文生（同志社大学）

グローバル化の時代にあって「西洋」と「東洋」の範疇化のしかたそのものが問い直され、文化のアイデンティティなるものが境界を超えて流動的になる今日、比較哲学の営みはたんに、複数の思想の併置や差異化にとどまりえず、境界を揺さぶって侵入してくる他者を受け入れ、その訴えに応答した果てに「主体」を築き直す、真に双方向的な対話と、その育成に関わる広義の教育的作業を求められる。この〈比較—教育—哲学〉の試みを通じて、哲学というサブジェクト(the subject of philosophy)の社会的、実践的機能も問い直される。本コロキウムは、ポール・スタンディッシュ著『自己を超えて：ウイトゲンシュタイン、ハイデガー、レヴィナスと言語の限界』（斉藤直子訳）（法政大学出版局 2012年）を起点に、著者スタンディッシュ氏を交えて異文化間対話の場を創設し、「自己を超えて」受容性と慎み深さを志向する「哲学のサブジェクト転換」の著が拓く言語の可能性を模索する。「自己を超えて」の果てに築かれる代替的な主体の姿はいかなるものか。「慎み深さ」を背負う思考・言語形式は、現代社会と民主主義においていかに実践哲学としての機能を果たしうるか。『自己を超えて』が日本という社会・文化の中で、この時代に日本語で出版されたことの波及的意味合いは何か。これらの問いを中心に、報告者と討論者の議論を展開する。

Colloquium 3

9:30~12:00 523A教室

政治と道徳のあいだ

—— H. アレントの視点から ——

企画者：村松灯（東京大学・院生） 報告者：田中直美（お茶の水女子大学・院生）
田中智代子（東京大学・院生）
司会者：小玉重夫（東京大学） 村松灯

指定討論者：丸山恭司（広島大学）

政治と道徳の関係については、これまで政治学を中心に様々に議論されてきた。「善」の探究をあくまでも私的領域のものとして捉えるリベラリズム、共同体への帰属を重視し、その共同体における「共通善」の探究を唱えるコミュニタリアニズムなどはその代表である。しかし、H. アレントの立場から言えば、両者は「善」をあくまでも私的なものとしてのみとらえ、政治をもつば私的幸福的追求としている点で、「社会的なもの」の拡大を助長する傾向をもつものとして批判される。こうした批判から彼女は「善」の探究が単なる私的幸福的追求とならないよう政治と道徳を区別しながらも、公的領域における市民の「善き生」を強調するのである。

本コロキウムでは、アレントにおいて区別されながらも密接に関連づけられている政治的なものと道徳的なものの関係を、彼女の思想に内在している複数の視点から明らかにすることを課題とする。具体的には村松が「共感」の観点から、田中（智）が「真理」をてがかりに、田中（直）が「言語」を採り上げ、考察を深めてみたい。アレントの思想のみならず、政治と道徳との関係について、参加者皆様からの幅広いご意見を賜りたい。

Colloquium 4

9:30~12:00 523B教室

教育関係論・学び論から世代継承のメディア論へ

—— 日韓の教育思想史研究は世代継承の実践知をどのように論じ、発信してきたか ——

企画者：岡部美香（京都教育大学） 司会者：鈴木晶子（京都大学）
報告者：岡部美香 指定討論者：高松みどり（滋賀短期大学）
高橋舞（立教大学）
安京植（釜山大学校）
朴宰永（釜山大学校 教育発展研究所）

文字、絵図、声、音、ふるまい、空間構成…。さまざまなメディアを介して、人は生命と文化を次世代に繋いできた。メディアに、またメディアによって開かれ伝えられる世界にどう出会い、どう向き合うか。この態度形成には、身体を伴う体験を通して身につけられる実践知がしばしば作用している。世代継承のメディアにかかわるこの実践知をめぐって、教育思想史研究はこれまで何をどのように論じ、国内外に発信してきたのだろうか。本コロキウムでは、この問いの追求を通して、従来の教育関係論や学び論の射程にはおさまらない世代継承の現象や構造について考察しようとする思想史研究の枠組みを、歴史的・教育人類学的な視座から描出してみたい。その際、韓国教育思想研究会の安京植会長と朴宰永会員から、韓国の教育学界におけるメディア研究の現状と課題について報告していただく。日韓の議論をつき合わせるなかで、私たちは、文字と文字以外のメディア、近代と伝統、西欧と東アジア、それぞれの拮抗と相互浸透について検討することになるだろう。また、東西・日韓の比較研究やその成果の発信に際して行う翻訳の営みにおいて、あるいは文字以外のメディアや実践知を言語を用いて研究することにおいて作用するポリティクスと文脈依存性についても討議することになるだろう。

Colloquium 5

9:30~12:00 525A教室

「高等」教育とはなにか ——思想史が問う——

企画者：松浦良充（慶應義塾大学）

報告者：藤本夕衣（東京大学・特任研究員）

西村拓生（奈良女子大学）

松浦良充

司会者：西村拓生

西村拓生

大学は「高等」教育機関であるとされている。しかし、それはいかなる意味で「高等」なのか。大学に対して「改革」圧力が強まっている今、自らが従事しているのが理念的にも実態的にも「高等」教育機関である、と断言できる大学人は、はたしてどれだけいるだろうか。翻って、そもそも歴史的に、大学が「高等」教育機関であるというのは、どれほど自明なことだったのだろうか。

これらの問いを念頭において、本コロキウムでは、昨年の第22回大会シンポジウム〈「大学の危機」を思想史が問う〉を継承・再検討しつつ、以下のような論点について議論する。——「高等」教育と「大学」教育の違いは何か。大学の知的再生産にとって教育の意味とは何か。フンボルト理念は日本でどのように受容・評価・批判されてきたのか。

総じて本コロキウムでは、「高等」教育を成立させ支えてきた知の構造や社会的条件を思想史的観点から問い直したい。それを通じて、大学をめぐる議論における思想史研究の意義・展望・課題を明らかにすると共に、有用性や効率を志向する近年主流の大学論とは異なった視点から、私たちが能動的に大学をつくる手がかりを求めたい。



政治的教育人間学の成立可能性を考える

——フロム・マルクーゼ論争の再読を手がかりとして——

報告者：関根宏朗（岩手県立大学）

司会者：岡部美香（京都教育大学）

フランクフルトの社会研究所で同僚だったエーリッヒ・フロムとヘルベルト・マルクーゼ。同時代に生きたこの二人は、のちに後期フロイト思想の解釈をめぐる『ディセント』誌上等で激しい論争をおこし、それはアメリカ批判理論の初期のハイライトのひとつになっている。フロイトが言うところの現実原則と快楽原則とのせめぎあいを乗り越えるために、社会制度のあり方を第一に見直すか(マルクーゼ)、個人主体の意識をまず変えるか(フロム)といった態度の別はそのまま、社会変革論にもつながる人間学を展開した思想家と、自己実現論を模索した臨床家という、彼らそれぞれのスタイルの違いを反映している。

だが近年の研究においては、この二人の思想は相違点よりも類似点の方が多いという指摘もなされており、実際それを直接的に裏付けるかのような知的交流のあとも確認できる。本報告では、フロムとマルクーゼの思想に通じ合うところが少なからず存在していたのではないかとの見通しのもと、彼らの思考が交錯ないし収束するところを理論的(かつ思想史的)に再構成する。

むろん報告の最終的な意図は、初期アメリカ批判理論のアクチュアリティを強調することだけではない。政治的教育人間学と臨床的教育人間形成論とが交感する上記の図式を手がかりに、本報告では、現代におけるいわゆる教育人間学の政治化可能性について実験的に考察したい。とりわけ京都学派の流れを汲む森昭氏の仕事、そしてその思想を継ぐ田中毎実氏による臨床的かつ哲学的な人間形成論の意義に強く留意しつつ、新たな「政治的教育人間学」を展望する。

西洋近代教育への対応の仕方をめぐって

——教育の「中国化」を手がかりに——

報告者： 日暮トモ子（有明教育芸術短期大学）

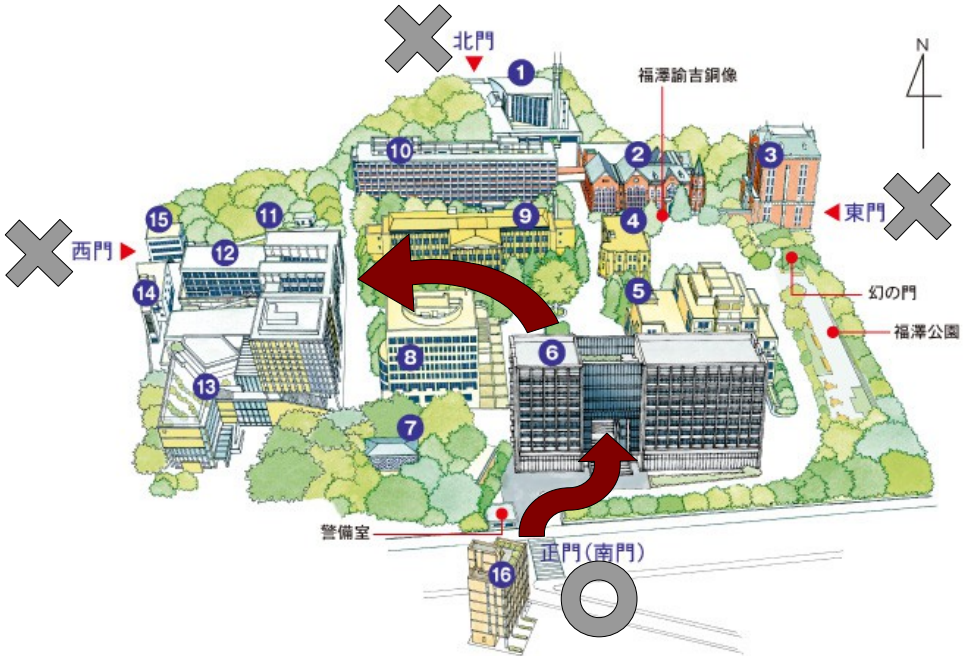
司会者： 今井康雄（日本女子大学）

指定討論者： 上野正道（大東文化大学）

周知のとおり中国は、改革開放政策以後、市場経済の導入を経て、世界経済を牽引するまでになっている。中国共産党による政治体制のもと社会主義を理念として掲げているが、現実では、経済格差、教育格差、民族問題など様々な社会問題が生じている。グローバル化が進む世界情勢のなかで、広大な国土と人民を抱える社会をどのような原理や思想によって一つにまとめてゆくかが今日の中国の大きな関心事となっている。その表れの一つが、中華民族意識の発揚、愛国主義教育や公民教育への関心の高まりである。まさに、近代社会が抱えている矛盾に直面している状況がみられる。

中国が近代化の問題に向き合っていた時期は今日だけではない。国民国家形成期、とくに「科学」と「民主」をスローガンに掲げて展開された五四運動前後の時期の教育界の状況はデューイの訪中（1919～1921年）の影響もあってアメリカ化されていたと言われる。たしかにアメリカ留学経験者が各地で活躍していた。しかしながらその後の教育界はしだいに中国の当時の社会の実情に合わせた教育（教育の「中国化」）へと論調を移してゆく。報告では、当時のデューイの教育理論や思想の移入および受容の在り方を中心に、なかでも「平民」や「公民」概念をめぐって、西洋近代教育への中国の対応の仕方について検討を試みる。デューイ思想を自由主義的な解釈よりも、民族解放や農民解放といった社会改造の方法的理論として解釈した状況を確認することになる。デューイ解釈の検討を通して、教育近代化過程における国民国家と教育の問題を考える手がかりを見いだしたい。

キャンパス地図・お食事処案内

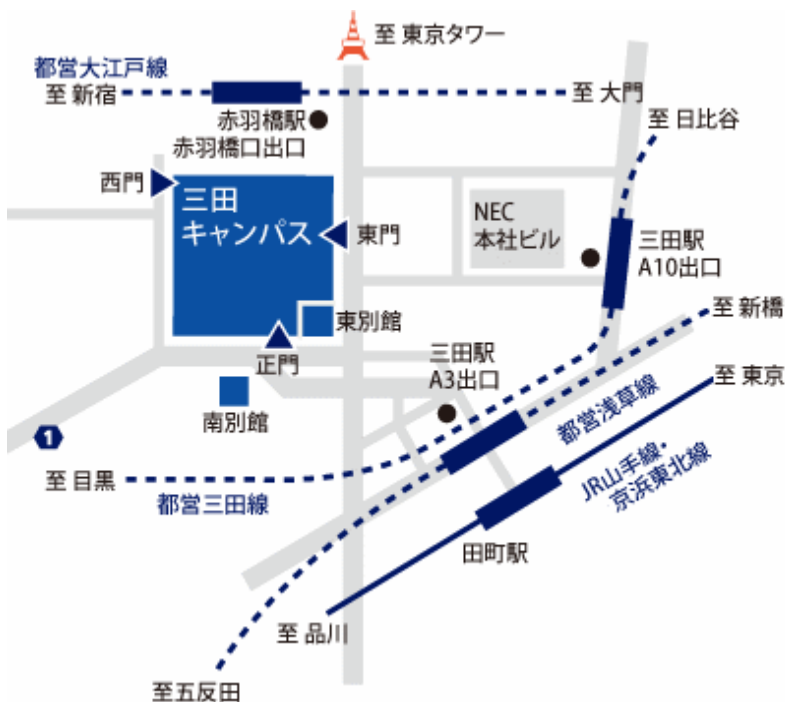


- ・ 正門から入って階段を上り、左手奥の**西校舎 (⑫の建物)** が大会会場です。階段を上って2階に受付および会場がございます。なお、東門・北門・西門は使用できませんので、ご注意ください。
- ・ 第1日には学内下記食堂および売店が営業予定です。
 - ・ 山食：西校舎 (⑫の建物) 1階北側
営業時間10:30～14:00
 - ・ 生協食堂：西校舎 (⑫の建物) 地下1階北側
営業時間11:00～14:00
 - ・ ザ・カフェテリア：南校舎 (⑥の建物) 4階西側
営業時間11:00～13:30
 - ・ 生協購買部：西校舎内の階段を下り切って正面右手 (⑭の建物)
営業時間10:30～14:00
- ・ 第2日は学内食堂が休業のため、あらかじめお食事をご用意いただくか、学外の飲食店をご利用いただきますよう、お願い申し上げます。

慶應義塾大学三田キャンパス

東京都港区三田2-15-45

アクセスマップ



三田キャンパスまでの交通機関

- ・ JR山手線／JR京浜東北線「田町」駅下車、徒歩8分
- ・ 都営地下鉄浅草線／都営地下鉄三田線「三田」駅下車、徒歩7分
- ・ 都営地下鉄大江戸線「赤羽橋」駅下車、徒歩8分

教育思想史学会事務局
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
慶應義塾大学文学部松浦良充付
事務局 E-Mail: office@hets.jp